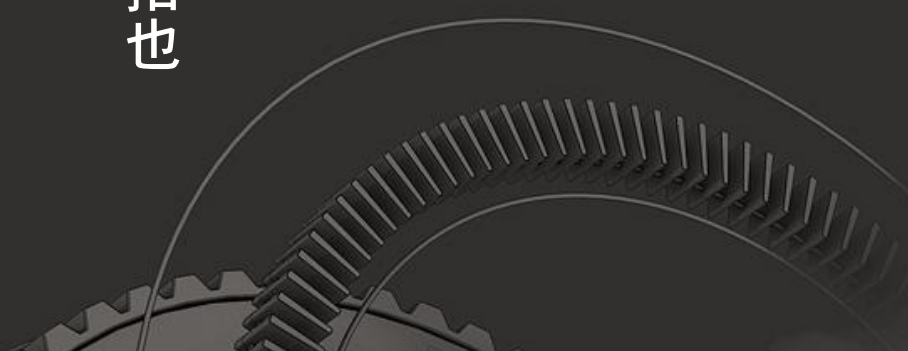


「彼らの奇跡の
ような4日間」

工藤 拓也



夏、終わりは、希望

それは、いつも通りの風景のはずだった。

僕たちの通う学校の正門には、僕等以外には、誰一人としていない。

金曜日なのに、祝日ですらないのに、誰もいないことに見向きもせず、他の二人と逆両手に花の状態出歩いている。

突然、肌白白おとなしい彼女がそわそわし始めた。それに合わせたように中肉中背の優男も、身震いしている。

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

校舎前で、先生が、いないか確認をしてから校舎に入る。

靴を履き替え、階段をあがる途中、不安になっている二人を励ましてあげたいけど、僕が励ますと、さらに不安に鳴ってしまうだろう。

「大丈夫だよなあ〜」

二人とも不安に駆られているようで、こうなっては、歩くのですら遅くなってしまう。

「大丈夫、誰も知らないし、計画通りだよ、ねっ！」

励ましてみたが、二人とも安心せず、逆に二人を不安がらせてしまい、自分の役に立たなさを再度理解できてしまった。三人して、不安の中、扉を開けた。僕自身は、ある程度、覚悟して

きたんだ。僕たちは、顔を見合わせて、手を繋ぐ。

「さあ、逝こう」

「あああ」「ううん」

次の瞬間、彼らの姿はきえていた。

後には、三人分の靴が寂しく置いてあるだけだった。

秋、道しるべ

木曜日

朝、僕にとつての毎日が始まる。

いつも通りの服装で、いつもの学校に通って鞆を開けて座っている。

「おいっ、お前良いもん持っているな！」

クラスのチンピラが僕の鞆に入れていた菓子を見つけるやいなや、鞆から出し、勝手に食べてしまっている。

「ありがとな、ハーフ野郎」

ちつとも、ありがたくおもってねえーよと、でも言うように、机を蹴り離れていった。

僕の机には、油性のペンで、様々な事が書かれているけど、気にする必要なんてない。むしろ、朝の時間で綺麗にしなくてはならない。ホームルームの時間の前に、片付けを終了させた。いつもの時間だ。ケータイを取り出し、チャットを始めた。

僕が、チャットのルームを作ると、すぐに一人集まった。途中参加オーケーのルームには、パスワードがいる。

1、「おはよう、二人とも。学校も、今日までだね」

あいさつを交わしてからが、僕たちのチャットは、始まる。

2、「おはよう。そうだね、もう、少ししかないんだよね」

返信が来た、もう一人も、今、入室したようなので、話を進めるために、文字を打つ。

3、「おはよう、俺達の計画、成功するか」

もう一人からも、返信が来た。二人とも、心配してるようだけど、やるしかない。

あいつらに思い知らせるためには。

1、「大丈夫、僕が絶対に成功させるから」

数ヶ月かけてきたんだ。ほかの方法は、もうもうない、これ以外にも、様々な事をしてきたけど、無理だった。

後は運任せだ。

2、「うん、わかったよ、君は、今日は何するの？」

確かに今日の下準備は、任せているし、暇だね。

1、「ぶらぶらした後、帰るよ」

久しぶりに行きたい場所もあるからね。

3、「じゃあ、俺は準備したのを確認して、全員、きたくするまで、見とけばいいな。」

下準備した物を最後の最後に壊されては、元も子もないからね、見張っててもらわないと、

1、「大丈夫だね、それで」

手紙も仕込んでいるはずだから、後は、あの子次第だね。

2、「私は、メイク用材料とのりですよね」

メイクで、怪我を消して、ばれないようにしないと、いけないね。

1、「大丈夫」

そろそろ、予鈴が鳴る時間かね。

1、「じゃあ頼んだよ、解散します」

解散ボタンを押して、解散すると、同時に予鈴が鳴る。ホームルームとは、言うが、特にない。ホームルームが終わり、1時間目の準備をしていると

「おいつ、宿題のプリントこうかんしてくれよ」

また来たよ、プリントくらい自分でやれよ。

「交換させてもらうから、それじゃあなっハーフ」

また勝手に、持って行ったし、しゃあない。答えぐらいは、ぱっぱと、やるかね。

授業は、いつも通りの雰囲気、今日一日やることなくて暇を持て余していた。それなので、昼まで寝ることにした。

昼休み、お腹が鳴ってしまったので、売店で、適当な物を買って、歩いていると、廊下で、またもや、チンピラに、話しかけられ、今度はお金貸してと言いつつ、集団で、囲んで、喝上げとは、とことん、いやな奴だな。もう、不良同然だろ。それにしても、不良の奴に、お金を渡すことになるとはね。

教室で一人、昼食をとった後、特にやることが思いつかなかったので、放課後まで、寝ることにした。

放課後になると、教室の掃除担当に起こされ、掃除をしろと言われた。理由は、暇だからいいだろうとのことだそうだね。本当に、嫌な奴ばかり周りにいるよ。

掃除が終わった後、荷物を持って、仕掛けの所へ、向かうと、中肉中背の男が仕掛けを動かしていた。

裏切られたと思ったが、僕にとっては、もう自分のことなど、考える必要なんてなかった。学校から出た後、家とは、反対方向に歩いていった。今日は、家に帰らずに、教会で寝ることにしていた。そのため、制服のまま、山に向かう途中、クラスの奴らから、嫌がらせを受けたけど、気にしないで、歩いていると、

「きゃー！」「痛！」

十字路のところで、誰かとぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？」

よそ見していた自分のせいだ、女性に怪我を負わせては、男として駄目だと思う。

「すみません、よそ見をして」

手を差しのばすと、

「いえ、わらわも、私情で、いそいでいた者で」

手をつかまずに、立ってしまった。気まずい、手を戻した方が……………

「おぬし、信仰用の家を知らぬか」

信仰？家？建物かな？なら、今から行く教会が一番じゃないか！

「案内しますよ」

手を戻さずにいて良かったー

「おつ、すまぬ、よろしゅう」

僕も向かう予定だから、関係ないけど、でも、今日は、僕と会話できそうにないね。

「じゃあ、行きましょう」 「おおっー」

教会までの道のりの中、昔言葉の少女に、スポットなどを教えつつ歩き、しばらくしたら、教会に辿り着いた。

「ここが教会だね。あなたの言っていた、信仰用の、家？ですね」

教会は、家なのか、そもそもこんな所に用がある人自体、いないでしょう。

「おおつ、ここじゃ、わらわは、ここに用事があったのじゃ、すまぬ、おぬしのおかげじゃ、いつかお礼させてもらえぬか」

ここに用事があったんだー、まあいいけどね、お礼ねー、特に無いね。

「別にいいですよ、迷惑かけたのは、こちらですし、僕も、今日は、ここに用事があって来たのですからね」

用事と言っても、今日一日、寝泊まりして、お祈り、まあ、神頼みですけどね。

「ではでは」

突然、目の前で、昔言葉の少女が、手を広げて、輝き始めた。それもすぐに輝きを失っていった。

だが、そこにいたはずの少女はいなくなり、あたりも暗くなっていた。

「帰ったのかな、まあいいや」

僕は、くちて、ぼろぼろに剥がれた女神像の前で、手を組んで、片膝立ちになって、目をつぶる。

「どうか、あの二人を助けてください」

お祈りは無事に済んだ。

「さて寝ようかな」

この変な願いを聞き届けてもらうために、お供えをして、僕は寝た。

また木曜日

朝、私は、いつも通り、教室入ってすぐに鞆から、ケータイを出し、チャットルームを探す。いつものルームには、パスワードが、掛かっているから打って、入室。

1、「おはよう、二人とも。学校も、今日までだね」

挨拶をされた、彼はいつも、ルームを開いてすぐは、挨拶を交わしてくれる。それでも、私は、今日までという言葉に反応してしまう。

2、「おはよう。そうだね、もう、少ししかないんだよね」

返信したけど、三人目の人が、来ず、段々、不安になってきた。

3、「おはよう、俺達の計画、成功するか」

全員揃った、でも、私は、覚悟しきれていなかった、もし他の二人が、もう覚悟を決めていたら、

1、「大丈夫、僕が絶対に成功させるから」

そうだよ、彼と私と俺と一緒に作り上げてきたんだもの、絶対い、成功させないと

2、「うん、わかったよ、君は、今日は何するの？」

リーダーの彼には、いつも無理させてきたんだから、今日くらいは、休んで欲しいな

1、「ぶらぶらした後、帰るよ」

もしかしたら会えるかも、

3、「じゃあ、俺は準備したのを確認して、全員、きたくするまで、見とけばいいな。」

作品を壊されたら、また時間がかかるからね、

1、「大丈夫だね、それで」

後、必要な物は二つとも、私が作ればいいだけ？

2、「私は、メイク用材料とのりですよね」

何するのか、知らないのだけど、完璧なものにするために必要なのよね？

1、「大丈夫」

そろそろ、予鈴が鳴る時間みたい

1、「じゃあ頼んだよ、解散します」

チャットが終わって、次の授業の準備をしてると、

「ちよつと、あなた、最近好きな人ができたのよねー、それって、誰なの？」

好きな人ー、好きな人は、チャットのリーダーの人だから、誰かは、知らないの、明日、会えるからいいんだけど

「まあいいわ、今日は特に怪我してないし、恋する乙女には、いいことあるよ」

嬉しかった、一番の親友が優しく話しかけてくれる学校

が、好きなチャットのリーダーがいる学校が何よりの宝だった。

予鈴が鳴った後、いつも通りの時間が流れていった。

放課後、作品のために買い物に行かなくちゃ。

授業道具をしまっていると、

「なにこれ？」

手紙が入っている、まあいいわ、じゃあ行こう。

廊下には、光が差込んでいる。近くの教室を覗くと、幻想的な風景が広がっていた。たった一人で、掃除をしている人が、不思議な雰囲気醸し出していた。

てっ、そんなことしてないで行かないと。

賑やかな町並みの中、小さなモールで、買い物をして、外に出ると、少女が、走ってきた。

「ぬしよ、わすれておったぞ、ではな」

私のハンカチを届けてくれたと思うと、すぐに、走り去ってしまった。あ！お礼してない、どうしよう、いつか会えたらお返ししよう。

帰宅後、部屋にこもって、明日の用意をしてから、夕食の支度をして、親の帰りを待っていたら、電話がかかってきた。内容は、今日、明日と、帰ってこないとの事、私としては安心出来ても、暇だし、今日はもう寝よう。

さらに木曜日

朝、俺はいつも通り、自転車に乗って、学校に来て、鞆をあけて、寝る。

「おいつ、ケータイ、鳴ってるぞ」

んんっ、もうそんな時間か、チャットルームに、パスワードを打って、入室する。

「すまねえーな」

さて、何あるかな、

1、「おはよう、二人とも。学校も、今日までだね」

2、「おはよう。そうだね、もう、少ししかないんだよね」

おおっ！あいつら、もう、揃ってるじゃねえか

3、「おはよう、俺達の計画、成功するか」

ちよっと不安気味に書いたけど、別に不安じゃねえからな。

1、「大丈夫、僕が絶対に成功させるから」

それも、そうだな、あいつが考えて、何ヶ月もかけてきたんだぜ、やってやるよ。

2、「うん、わかったよ、君は、今日は何するの?」

そういうえば、あいつだけ、一度も休んでねえし、いいだろう。

1、「ぶらぶらした後、帰るよ」

そうだ、休め休め

3、「じゃあ、俺は準備したのを確認して、全員、きたくするまで、見とけばいいな。」

大事な計画物をブツパツされたら、無駄骨になっちまう。

1、「大丈夫だね、それで」

じゃあ体質するか、退室とつ、じゃ寝るか………放課後、計画の確認をすると、1本

だけども、位置がおかしい、動かしかねえとな

「よし、完璧だ」

おれは、先生に見つからないように、屋上から、隠しカメラで、監視していると、

「おいつ、こりゃ、どういう事だ」

目の前に少女が知らぬ間に倒れていた。心配になって、駆け寄ると、

”ぐう~~~~”

空腹なだけかよ！心配して、損した、食う物は……あった、

「ほれ、食えよ」

少女は、体を起こすと、パンにかぶりつき、あつさりと食べてしまった。意外とかわいい少女は、俺の方を見ると、

「ありがたいな、おぬし、お礼をさせてはくれぬか」

うん、お礼か……どれどれ、監視カメラに、何かないものか、ハンカチじゃねえか、アップして、見せる。

「こいつを、この女に届けてくれ」

少女は、笑顔で、頷いた後、一言、お礼を言ってから、去っていった

「全くだ、しばらく静かになるだろ」さらに、しばらく

すると、先生達も、帰宅していったので、帰ることにした。

「ただいま」

と言っても、誰もいない、両親などいない、俺は、いつも通りに、夕食を作り、食べる。

「美味しくねえよ、くそがつ」

くそつ、もうだめだ、寝る。食事の後片付けをし、布団を敷いて、寝る。

冬、枝分かれした道

真つ白な世界、ここが、わらわにとつての世界

「何なの、これ」

彼女にとつては、死後の世界と思うだろう、

「おぬし、ここは、私の世界じゃ、お主ともう一人に用が、あつて、呼んだのじゃ」
やがて、もうひとりの中肉中背の男もやってきたので、訳を話し始めた。

「お主達に、問おう、奴、チャットのリーダーを助けたいと思うか」

当然の質問に戸惑っているようだが、決まってきたようじゃな

「では、答えを聞こう」

まずは、おなごからじゃな

「私は、助けたいです。彼が助けてくれたから、今の私があるの。なら、今度は、私の番よ」
ふむ、いい答えじゃ、では、男は、

「俺も同意見だ。俺が、楽しいと思えるのは、こいつらとの日々のチャットとリーダーの奴が、オレのために、色々と支えてくれたからな」

合格じゃな、では、

「では、現実に戻り、奴を、助けてやると良いだろう」

歩み寄ると、

「あのつ、なんで、こんなにしてくれたんですか」

ほおう、良いだろう

「奴が、唯一の信仰者だったからな、後、お互いの名前ぐらい知っておくべきだな」
ではな、ここから先は、お主次第だぞ、□□□□これからよろしゅうな

真つ黒な世界、僕たちは話し合っていた。

ねえ、私はどうすれば、私は…どうすれば…何をしたら、私は、…何をすれば…私は…することの出来なかった私は…存在のできなくなった私は…どうすれば□□になれるの？教えてよ

そうだね？僕から言えるのは一言

”君の決めることさ、僕には決められない”

そう、僕は、寂しがり屋の一人ぼっち…

優柔不断の一人ぼっち…

役に立たない一人ぼっち…

ぼっちで、どんなことだろう、最後まで、一人ぼっちなのはどんな感じなのだろうね。壊れている僕には、良い最後だと思うよね、君はどう思う。

私は、存在できないけど、一人でのおわりはとても怖い：

とても怖い、いえ！違う……嫌なだけなの。あなたもそうでしょう？

そうなのかもしれない・・・けど、僕は、一人ぼっちなんだ！僕にとつて、友達だとしても、うらぎられてしまうんだ。そんなことになるなら僕は・・・一人でいい！

だれもいらぬ、君も、僕より、自分ことを、考えてろ！

無理！あなたの中に私がいるの、私自身、もっと、世界をみていたかった。でも、あなたが、いなくなつては、あなたに、作り出された私も、いなくなつてしまう。私の、存在した証すら、なくなつてしまう。これが、最後まで、思う、けど、あなたは、もっと、視野、を、広げ、なさい、少し、は、良い、友達、を、もつて、いる、じゃない……………

「え！どういふことだ・・・」

声が出ない、死ぬのかな・・・

「大丈夫か！」 「ねえ、起きてよ！」

目の前で、光が広がる。

春、ただ一つの思いを……

あの日から、僕の日常に変化は、特にない。

ただ一つ、僕の思い方が、変わったただけだった。

僕の名前は、喜吉善士、喜びに、運良く生きてるのは、この前、分からしてもらえた。今は、もう一人の僕と、会話できなくなってしまうけど、僕の日常は、充実している。

今日も、いつものメンバーで集まる。

いつか、助け合えることを他の人に……

「じゃあ、行こうか」

集会、私にとって、たった一つの支えであり、好きな人にあえる時間。

私の名前は、樹森枯木、どんなときでも、たくましく、過ごせています。今は、友達と、ルームシェアしています。こんな楽しい日々が続けばいいな。

そして、いつか、この想いを……

「解散します？」

今日の集会が終わった。

最近、自分の飯が、おいしく感じられる。これも、あいつらのおかげだな。おれも、いつか、あいつらを支えて行きてえー。くそく、もう寝るか。いつか、あいつらに…

願わくは、明日も彼らが“おはよう”と言える日々を、支えていきたい。

「おはようと言える日々を……」

「「「伝えたい！」」」

彼らの奇跡のような4日間

2014年3月1日 発行

著者 工藤 拓也

発行者 工藤 拓也

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Takuya Kudo 2014

